Introduction

哲学とデザインの交差するところ

梶谷 真司
東京大学共生のための国際哲学研究センター（UTCP）センター長

○プロジェクト誕生の経緯〜環境問題から共同体のデザインへ

事の発端は2012年の12月、大学院時代の後輩、鞍田崇君との再会である。私が京都を離れて以来、10年ぶりであった。彼は当時、京都の総合地球環境学研究所（通称「地球研」）に所属し、私と一緒にプロジェクトをやりたいということで、駒場まで相談に来てくれた。

地球研のプロジェクトはとてもユニークで、外部の研究者を代表にして、内部の研究者と連携して進めていく。そうやって内部だけで閉じずに外部と協力し、たえず新たな風を吹き込む仕組みをもっている。Research Institute for Humanity and Nature（RIHN）という英語の名称からも察せられるように、文理融合の学際的な研究所であり、実に多彩な研究者が関わっている。とはいえ、研究者もプロジェクトもやはり理系が中心である。そこで何か人文学がベースにあるような学際的研究を立ち上げたいというのが鞍田君の思いだった。折しも私は哲学対話の活動を始め、いろいろと実験的なイベントをしていた。それをインターネット等で見ていた彼は、私となら何か新しいことができるのではないかと期待してコンタクトをとってくれたのだった。

地球研のプロジェクトには、環境問題、とりわけ地球規模であるか、そこにつながる問題を扱うことが求められる。さらに地球研は「超学際（transdisciplinary）」という方針を掲げていた。これは学際的、様々な分野の研究者が関わることに加えて、アカデミズム以外の民間や行政の人たちと協働することを指す。したがってたんに研究者だけではなく、いろんな人たちと関わり、何らかの現場やフィールドをもつことが重要であった。

鞍田君は民芸を自らのフィールドとして、様々な地域の人々や自然に関わってきた。私のほうは哲学対話を通して、教育、コミュニティ作り、地方創生に取り組んでいた。それで2013年の春、私たちはIS（Incubation Study）というスタートアップのプロジェクトに応募した。課題名は「地域性と広域性の連関における環境問題〜実生活への定位と哲学対話による共同研究」であった。今振り返っ

てみると、ずいぶんぎこちなく、ダサいタイトルだと思う。まだまだ焦点が定まらず、言葉が見つかっていなかったことを痛感する。けれども、このあと3年間続くプロジェクトで取り組むことになる基本的な問題意識は、すでに表れている。

「地域性と広域性」とは、今日の環境問題における課題の一つを、原因と結果が離れていることに見るという点を示している。私たちは自分たちがしていることが遠く離れたところで破壊や汚染を引き起こしているという意識をもちにくい。だからどのような問題がなぜ起きているのかが明らかになっても、行動に結びつかず、事態は変わらない。それは一つの国の中では都市と地方の関係であり、国際レベルでは、先進国と途上国の関係にあたる。だから課題とすべきは、地域的なもの、ローカルなものをより広い範囲、場合によってはグローバルなものとどのようにつなぐかということである。それをただ理論的に明らかにするのではなく、実生活の中にどのように実現するのかを考えようというのが、私たちのプロジェクトの趣旨であった。

他方でその当時私は、哲学対話が考える力をつけるのに役立つだけでなく、一つの問いについて一緒に考えることが、人間関係やコミュニティ作りにきわめて効果的に役立つことに気づいていた。しかもそのさい参加者たちは、境遇が違っても率直にフラットに話せて互いを尊重できるようになり、さらに各自が自主的・積極的に行動するようになる人も出てくる。そこに私は、社会問題でしばしば重視される「当事者意識をもつ」や「自分事にする」と言われるものの具体的な姿を見い出していた。

そんな企図をもって始めたプロジェクトは、2年目の2014年にFS（Feasibility Study）というより高い実現性を目指すプロジェクトにステップアップした。今度のテーマは「ローカル・スタンダードによる地域社会再生の実践と風土論の再構築」とした。ここでは「ローカル・スタンダード」（Local Standard）というキーワードを手にしたことが大きい。これは本書にも寄稿している服部滋樹さんをプロジェクトに参加してもらおうと思い、初めて会って話していた時に彼の口から出た言葉だった。グローバルスタンダードに対比しうるような、ローカルでありながら、それを超えたより普遍的な価値をもったスタンダードたりうるものという意味である。これを地域社会再生のキーワードにして、さらに理論的には風土論の再構築として位置づけようということになった。

「風土」とは、近代日本を代表する哲学者の一人、和辻哲郎の概念で、簡潔に言うと、「文化と融合した自然環境」である。通常は、伝統的な社会や文化の理解のために用いられることが多く、文化論の側面をもつ。だから歴史や現状の理解や解釈の理論となりやすい。それに対してこのプロジェクトでは、風土論を発展させ、地域を自然や文化と共にどのように変えていけばいいのかという未来志向の課題と結びつけようと意図した。さらに哲学対話との関連では、ここで

コミュニティ作りを対話のあり方ではなく、デザインの問題と関連させて考えるようになった。こうして私たちのプロジェクトの課題は、ローカルでありながら普遍的な価値をもちうるものを、どのように形あるものとしてデザインし、それをコミュニティの形成につなげるかとなった。

そして3年目の2015年、FR（Full Research）という正式な5年のプロジェクトに申請したが、不十分だとしてもう一年FSをさせていただけることになった。タイトルは少し変えて、「ローカル・スタンダードとは何か――地域社会変革のためのインクルーシヴ・アプローチの理論と実践」となった。そもそも都市と地方、先進国と途上国のような「中心」と「周縁」の関係は、中心に発言権と決定権が集中し、周縁のほうはそれが弱いか欠如している。そのため中心の利益のために周縁が犠牲にされる。この構造じたいは、環境問題に限らず、経済や教育、食料や平和など様々な問題に共通することであろう。したがってどのようにすれば共同体とそのメンバーが発言権と決定権、言い換えればイニシアティヴを獲得し、発揮できるかが問われなければならない。そこで「インクルーシヴ」というデザインの発想と手法に注目するようになった。

インクルーシヴとは、私の表現で言うと、いろんな人がおのずと関わり、一緒に何かをするようになるということである。そのさいこの「いろんな人」を一つに統一したり融合したりするのではなく、それぞれが固有性を保ちつつ、緩やかに協働しうるような関係性の中に身を置くこと、そのような場を作ることが重要である。そこには哲学対話と通じるものがある。それぞれが自分の立場から他の人たちと共に語ることで、それぞれが考えを深めていく。そうした哲学対話が生み出す「探究の共同体」（Community of Inquiry）は、参加者のイニシアティヴを尊重し、育てる共同体でもある。

結局、私たちのプロジェクトは、Full Researchには行けなかった。そういう意味では十分な成果は出せなかった。しかし収穫はたくさんあった。何より大きかったのは、私が考えようとしていたことと、一部のデザイナーが考えていることがきわめて近いことに気づいたこと、彼らと様々な形で協働できることが分かったことである。かくして2016年、〈哲学×デザイン〉プロジェクトが始動した。

○時代背景～哲学と芸術をとりまく社会情勢の変化

プロジェクトを進めていく中で、私は哲学と芸術の違いを考えるようになった。この二つの分野は、一方は地味で他方は派手なイメージはあるだろうが、兄弟のような関係にある。80年代くらいまでは、いずれも生活に不必要なもので、物好きが趣味でやるものだった。世の中の役に立たない、立たなくていい、立たないのがいいのだと、うそぶいていた。そうして芸術家は新奇な表現を、哲学者

は斬新な思想を求めた。どちらも目指したのは個性の発露であって、実際にそれでやっていけるのは一握りであったとしても、目指す先、あこがれの対象はそこにあったように思う。

芸術の分野では、岡本太郎、横尾忠則、草間彌生といった国際的に有名な芸術家や、山本寛斎、三宅一生、山本耀司、コシノジュンコ、川久保玲、高田賢三のようなファッションデザイナー、丹下健三、磯崎新、黒川紀章、安藤忠雄といった建築家が活躍したのもそんな時代だ。同じ時期、哲学の分野でも、丸山真男、吉本隆明、廣松渉、山口昌男、柄谷行人ら、戦後知識人に続いて、フランス現代思想を受容した浅田彰や中沢新一、栗本慎一郎のようないわゆるニューアカデミズムの旗手たちが脚光を浴びた。

けれども、社会的に見ればごく一部であったにせよ、こうした芸術や哲学の興隆もまた、実際には経済的な繁栄に支えられていたように思われる。90年代に入りバブルが崩壊し、不景気が世の中を覆うと、その華々しさは急速に陰り、様相は一変した。芸術も哲学も、“望みどおり”無用のものとなったのである。それまでと違うのは、バブル期には役に立たないことが一部の人たちにとってはプラスの価値をもち、熱狂的に受け入れられていたのに対して、90年代以降はたんに必要とされず、世の中で居場所を失ったことだろう。

もっとも、どちらもそのまますたれたわけではない。私が思うに、芸術のほうは社会の中の様々なシーンで、いろんな人たち、とくに企業と一緒に物を作るようになっていった。90年代以降、家電製品、家具、日用品、衣料品のような身近なものに安価で洗練されたものが増え、多様化し、生活空間全体が審美的な意味で豊かになったのではないか。1980年に反ブランドを掲げて登場した無印良品が、90年代以降むしろブランド化したこと、ユニクロのような安くておしゃれなファストファッションが広まったのは、そうした時代の流れを象徴しているように思える。

また、景気が悪く、大きな建造物が作れなくなると、リフォームが増え、住みやすく、それでいてセンスのいい住空間が求められる。行政の予算が限られてきたせいか、住民参加型の町づくりが増える。すると、コミュニティのような形のないものを作る人たちが出てくる。世の中の様々なところで起きたこうした動きの中で、共通しているのは「デザイン」である。芸術は、一人で個性を発揮するのではなく、デザインという仕方で社会のいろんな人たちと協働し、積極的に貢献する道を選んだのだ。

他方、哲学のほうでも社会にコミットする動きが出てきた。環境倫理、生命倫理、医療倫理など、応用倫理学の分野が90年代以降、急速に拡大したのは、芸術同様、無用の存在になりかねない危機感から社会の役に立とうとした哲学なりの反応だったと見ることもできるだろう。ところが芸術とは大きく異なる点が

ある。哲学は社会の要請に応えつつ、「応用倫理」という自分自身のための固有の領域を新たに作った。そして対象からは距離をとって外から批判的に関わった。このように自分の立場を確保してそこから批判するスタンスは、90年代以前とさほど変わらない。様々な人たちと協働して何かを一緒に生み出すことはなかった。

それはそれで一つの態度であろう。しかしその結果、医療やビジネスの現場からは、批判ばかりをする哲学は敬遠されるようになった。産学連携でも「哲学者が関わるとブレーキをかけられるのではないか」と警戒される。もちろん批判は重要である。企業や政治や技術が暴走しないようにしなければいけない。けれども、そのためには批判しかないのだろうか。一緒に関わり、一緒に創っていくことで、より問題が起きないように物事を進めていくという選択肢もあるはずだ。

そうすることは社会全体にとってもいいことだろう。どんなに批判的なスタンスをとっていても、問題が起きた時にはすでに遅いのであり、外からどんなに鋭い批判をしても、しょせん外野のヤジにすぎない。哲学者にとってのメリットは、せいぜい直接関与しなかったという意味で、手を汚さず、無責任でいられるくらいのことだろう。そして言うのだ——「それ見たことか。言わんこっちゃない」と。

芸術は社会に関わり責任をとり、哲学は責任を回避したように私には映った。芸術のような関わり方もできるのではないか。社会の中で活動する様々な人たちと一緒に、時に泥をかぶる覚悟があってもいい。芸術は何か具体的に形ある物を生み出す。哲学は言葉と概念を生み出すことで、物事を形作る理念と方向性を与えることができる。社会をよりよいものにするには、今までとは違うものの見方、発想が必要になる。既存の物事を支える条件や枠組みを明らかにして、それを変えようとする時、広義の哲学が必要になる。そこに美的な感性が求められる時、広義のデザインが求められる。ここで哲学とデザインは交差する。デザインは哲学的であり、哲学はデザイン的なのである。

○哲学対話から共創哲学（inclusive philosophy）へ

哲学の中には社会にコミットするまったく別の動きもあった。哲学教育をはじめとする、哲学プラクティスである。日本では2000年ごろから始まり、とくに2010年以降に広まった。教育以外にも、哲学カフェ、哲学カウンセリング、哲学コンサルティングなど、多様な展開をしている。そこでは共通して「対話」、すなわち共に考えることが活動の中心となっている。

私が最初にこの対話型の哲学に出会ったのは、2012年に東大とハワイ大学と

の共同セミナーでハワイに行った時のことである。現地の高校と小学校で、「子どものための哲学」（Philosophy for Children：P4C）を体験する幸運に恵まれた。その時の衝撃、体の芯が興奮し震えるような感覚は、今でも忘れない。帰国後、私は哲学対話のイベントを様々なテーマとスタイルで行った。そこで出会うのは、いわゆる哲学のイベントに来るのとは、まったく違う種類の人たちだった。年齢層も高校生から高齢者までと幅広く、性別で言うと女性が多いのも特徴であった。哲学書など読んだことのない人、それまで哲学とは無縁であった人たちも多かった。そうした人たちが熱心に話し、考える姿は、どこかに哲学的次元を秘めた思慮深さと、人生に必要でありながら稀有な充足感があった。

しかもそれは、限られた一部の“デキる”人にのみ許されたものではなかった。一般に話すのも考えるのも苦手だと言われる、ごく普通の人たちが参加できる場だった。そして子どもも大人も、男性も女性も、都会の人も地方の人も違いはない。障害をもっていても健常者でも、学力が高くても低くても関係ない。個人的な差はあっても、社会的にどのようなカテゴリーに属するかに関わらず、誰もが話し、考える力をしっかりもっている。世の中には愚かな人などいないのではないかと思うほど、誰もが自分の言葉と洞察をもっている。

ちょうどそのころ新学習指導要領によって学校に探究の時間が導入され、「主体的・対話的で深い学び」が重視されるようになった。そこで哲学対話に期待と関心が寄せられるのは分かりやすい話であろう。しかし、少なくとも一見意外なのは、哲学対話をすると、参加者が仲良くなるということだった。バックグラウンドも境遇も違う様々な人が、一緒に遊ぶのでもなく、飲んだり食べたりするのでもなく、一つの問いについて一緒に考える。それでなぜか仲良くなる。人間関係がよくなる。哲学対話をしても、考える力や話す力がつねに身につくわけではないが、ほぼ確実に仲良くなる。哲学対話のそういう“効果”が口コミで広がり、学校以外にも過疎の村のコミュニティ作りや企業のチームビルディングの研修に呼ばれるようになった。さらに婚活にも使える！

世の中では少し前から、グローバル化や多文化共生、ダイバーシティ＆インクルージョンの名のもとに、「人のことを尊重しましょう」「お互いに理解し合いましょう」「人の話をしっかり聞きましょう」「分かりやすく話しましょう」「じっくり考えましょう」といったことが言われる。最近では「対話が大事！」「対話をしましょう！」とあちこちで聞くようになった。しかし、何をすればそうしたことになるのか、どうすればそのようなことができるのかよく分からない。そもそも人を尊重するとは、何をすることなのか。どうすればそれができるのか。相手を理解する、相手の話を聞く、分かりやすく話すとは、どういうことなのか。どうすればそれができるのか。対話とは何なのか。どうすればできるのかは、やはり分からない。

こうした諸々の分からないことがあることじたい、あまり意識されていないように思われる。だから誰も教えてくれない。にもかかわらず、訳が分からないままやみくもにやるから、「難しい」「できない」となり、日本人はダメだ、若者はダメだと失望したり批判したりして、結局あきらめたりする。哲学者なら、相互理解の原理的な困難さや不可能性を唱え、だからこそ対話へのたえざる努力が必要だと訴えるのだろうか。

バカげている。

哲学対話で一つの問いについてお互いに話し、聞くことで一緒に考える。ただそれだけと言えばそれだけのことなのだが、人を尊重するとか、お互いに理解するとか、分かりやすく話すとか、じっくり考えるとか聞くといったことが、ことさらに意図しなくても、自然にできてしまう。ほとんど“起こる”と言ってもいい。そこには特別な訓練も資質も必要ない。誰もが文字通り体感し、体得する。少なくともそういう希望がもてる。

いったい何が違うのか——場の作り方である。他者の尊重だ、相互理解だ、傾聴だ、対話だと一般に言われる時、そうしたことが行われる場をどのように作るのについて、ほとんどの場合無頓着である。そのようなことはたんなるノウハウであって、重要な問題であるとは思われていない。しかし哲学とデザインが交差するところから見れば、そこには開拓すべき領域、発見すべき現象、取り組むべき課題が途方もなくあることが分かる。

それは一言で言えば、いろんな人が協働しうるインクルーシヴな場のデザインの問題である。最近私はそれをもっと拡張し、「共創哲学」(inclusive philosophy)と称して展開している。そこでもっとも重要なのは、次のような問いである——共にいるために、共に生きるために、共に創るために、何をどのようにデザインすればいいのか？

私が一連の〈哲学×デザイン〉プロジェクトでコラボレーションしたのは、一見バラバラでまったく畑違いのように見えながら、この問いにそれぞれの仕方で向き合ってきた人たちである。だから私はその考え、言葉、行動に自分と通じるものを見出し、共感し、刺激を受け、あこがれる。このブックレットは、そうした人たちの思考や行動の記録である。登壇した人は総勢65名。そのすべての人に寄稿していただいた。心からの謝意を表したい。これがきっかけとなって新たなコラボレーションが生まれる機縁となればと思う。

2022年4月